後藤新平賞〈最優秀賞〉

STAGE

千葉県　市川高等学校　2年　及部　愛実

この夏、私は一人でニューヨークへ飛び立った。20か国から80人の同世代が集まり、皆で1か月間キャンプ生活を送りながら、リーダーシップや多様性について学ぶプログラムに参加するためだ。私は80人中一番英語が下手だった。流れについていくのが精一杯で、リーダーシップどころではない。日本では積極的な性分だったので、もどかしいことが何度もあった。話し合いの時間には、「上手く話せないし、発言せずに決まるまで待ってよう」と考えるようになった。

1週間経った頃、"safe space"について話し合った。それは単に安全の意味ではなく、「自分らしくいることを誰も責めない場所。他人のために自分を変えなくていい、自分のアイデンティティを生かす場所」という意味だ。いつも通り聞くだけだった私の耳に、ある発言が鋭く刺さった。"It is a STAGE to find who you are." それまでの私は、英語が話せないと思い込み、ステージで生きることから逃げていた。しかし私は既に、どんな自分も受け入れてくれる最高のステージに立っていたのだ。

それからの私は間違いを気にせず、とにかく話した。"safe space"のステージ上に言語の壁は存在しなかった。難題も、「これが日本語だったら私は何て答える?」と視点を変えると話し合いについていけた。

そんな中、キャンプの一環で2泊3日のハイキングに行った。10人で全ての食料や水、テント等を運び、風呂も入らず登山するのだ。私のグループには、私が一番苦手だったシャニースもいた。彼女は話すのが異常に早くて聞き取れない上に、お調子者だった。歩き始めて1時間経った頃、彼女が「もう無理、進めない」と言って、座り込んでしまった。見かねたリーダーが、「誰か代わりに彼女のテントを運んでくれる?」と言った。皆が容赦なく断る中、ある子が"You have enough space."と言ってきた。正直嫌だったが、運ばざるを得なかった。しかしその後も彼女は何度も止まり、徐々に雰囲気は悪化した。「私が運んでるんだから進んでよ」と何度も思った。私は助けてもらうことを情けないと思っていた。特別な理由もなく一人だけ楽をしている状況が不快だった。皆も交代で運んでくれるわけでもなく、チームメイトにも腹が立っていた。

しかし翌日、私の靴が壊れた。靴底がめくれ、ガムテープで巻いて補強するしかなかった。そのせいで滑りやすくなった靴を気にしながらも、私は彼女のテントを担いで進んだ。すると岩の下り坂に差し掛かった。雨上がりで皆疲れ切っており、自分が転ばないことで精一杯だった。すると突然、前を歩いていたシャニースが振り返って、"Hand"と言って私の手を握り、岩を下るのを手伝ってくれた。とっさに礼を言うと、彼女は「後ろの子を手伝ってあげて」と言った。この時から、グループ内で"Hand"は当たり前になり、それまで皆転んでいたのが嘘のように誰も転ばなくなった。彼女の一言が皆に助け合いを思い出させた。

そしてキャンプ最後の夜、一人ずつ皆の前で話す機会があった。最初の頃は「皆は英語が上手いけど、私は日本人一人で、一番悩んでる」と思っていた私は、実は自分一人じゃなかったことをその時知った。ザンビアの子が言った。「私のお父さんは、私と家族を置いて家を出た。彼は別の家族を持っていた。彼はそっちを選んだ。だから私はいつも寂しかった。私はお父さんが見捨てるくらい、悪い子なんだと思って生きてきた。けどここは"safe space"だから、誰も私を責めないし、いつも

笑顔を与えてくれた。寂しく感じることはなかった。"safe space"をくれてありがとう。」フィンランドの子が言った。「私は生まれつき体が弱くて、普通の子と同じように暮らせなかった。皆が私に気を遣うから、私はいつも平気な振りをしてた。けどここでは私は私を偽らなくていい。最高の夏をありがとう。」ここが"safe space"だからこそ共有できる話ばかりだった。皆勇気を出して涙ながらに話してくれ、聞く側も泣いていた。涙は同情などではなく、キャンプの間忘れていた現実の残酷さを受け止め、家族同然の仲間を愛おしむようなものだった。私達は"not safe space"に戻らなければならなかったが、絶望ではなかった。なぜなら、世界は広いけど、助け合えば"safe space"は作れることを学んだからだ。この体験は私の人生を変えた80人の家族との宝物だ。

協力の大切さ。わかってはいても、人は自分が辛い状況になると、醜い感情に支配され、周りを助けることを忘れてしまう。そんな時、シャニースのように手を差し伸べられるかどうかが、本当の"safe space"、そして仲間を作る礎となる。実社会で国際問題の解決に挑む時、ただ"Hand"と言うだけでは変わらない。しかし小さな手が少しずつ繋がって大きな輪になれば、"safe space"は実現できる。世界は、「画面の向こう」ではない。こんな私に"You talk beautifully."と言ってくれる最高の家族は、世界に、手をつなげる距離に、ちゃんといる。